

野上彌生子の世界

瀬沼茂樹

101028

I313.0
J157

228514



日文 701702693

岩波書店刊	野上彌生子の世界	瀬沼茂樹著
-------	----------	-------



野上彌生子の世界

一九八四年一月二〇日 第一刷発行 ©

定価二二〇〇円

著者 瀬沼茂樹

発行者 緑川亨

発行所 株式会社 岩波書店

〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五
電話 〇三・六五・四二二
振替 東京六二六四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan

目次

一	序章	一
二	写生文	九
三	『青鞨』の頃	三
四	生と死と	三
五	母親の文学	四
六	『狂つた時計』	五
七	謡曲と戯曲	五
八	『海神丸』と『大石良雄』	七
九	『みちのくの旅』	八
一〇	『真知子』	七

一一	『若い息子』	一〇九
一二	法政騒動の前後	二九
一三	『欧米の旅』	三九
一四	疎開生活	一四三
一五	敗戦以後	一五五
一六	『迷路』(上)	一六九
一七	『迷路』(下)	一七九
一八	中国旅行	一九一
一九	『秀吉と利休』	二〇五
二〇	『笛』と『鈴蘭』	二二七
二一	『森』	二二七
二二	随筆評論	二二九
二三	童話文学	二五一
二四	対談・座談	二六三

目 次

二五	白杵の風土と文化……………	二五
年 譜……………	二六	
あとがき……………	二七	

つて近郷に聞かぬ家であつたさうな。併し夫もまだ一
歩走るといふ程の間に、部下の花根様をいいたゞり
で、現在では江蘇東江、部下の諸君も國語を習ふに上
居る。いふは分つたものと、又阿十郎の親の次に、代
代の主人が已に割つた珍珍様と、會江東中の代に
の卒に歸郷の客に紛らして、毎晩一盃茶の方から馬
内の方へかゝり運ばれてゐた。江蘇東江の木根も
だん／＼出立を運つたのである。最後にて手紙がね
え一組の簡衣を、反古にもならぬ牧の紙片に引き
換へたに人手の代した年秋、會江東中の代に、その後
になつた江蘇東江の代になつての客答へ、死ぬる（無
名な者であつた）といふ様子は、一、一夜野分にかた／＼

野上彌生子は日本文壇、或いはひょっとすると世界文壇の最長老作家である。近來女流作家の活躍が目覚ましく、王朝期の再来を思わせるが、ただに女流作家の中だけではなく、日本文壇全体の中での文字通りの最長老作家である。大事なのは名前だけの最長老ということではなく、現に瑞々しい筆力を揮って制作に精励している現役作家としての最長老であることである。八十年近い長い生涯にわたって倦まず弛まず制作一筋に励み、ややもすれば陥り勝なマナリズムを知らず、驚嘆すべき息の長さを創作に賭けている。戦後いよいよその実力を発揮して長大篇に挑み、戦後文学史に特筆すべき傑作を次々に生むという稀有の精神力を発現し、私どもを叱咤激励して已まないかにみえる。

しかし、この巨人の精神力、その持続と集中の根源とを明かにするために、その文学的生涯の全般を概観することは頗る難事業であった。一つには文壇圏外の作家に終始して一貫して自己を持して誇らず、或いは謙虚に徒らに功を焦らず自己の道を追求しつづけて拙速に全文業を誇示することがなかったか、いずれともいえるが、今日までその作品の全貌を明かにする全集の挙あるをきかず、私どものまことに遺憾とするところであった。しかるに岩波書店版『野上

彌生子全集』全二十三卷別卷三卷の編纂の機会に幸に参加するを得て、その長い文学的生涯を「追体験」し、「理解」し、「評価」し、その概観を「野上彌生子の世界」として僭越ではあるが、私なりに纏めることができた。とはいえ寡作な作家の全業績は少いようにみえて、長い生涯にかくも厩大であり、概観すると称しても、ようやくほんの一端を伝えたとの咎は免れがたいであろう。さはあれ、私は私なりに私の試みんとする概観に示す作者の文業の特色の二三を予め考えておくことは、その世界を窺う導入部として便利とするところがあるにちがいない。

夏目漱石が彌生子の処女作『縁』を高浜虚子に推輓するにあたって「明治の才媛が未だ嘗て描き出し得なかつた嬉しい情趣」をあらわしたと最大の讃辞を惜まなかった。しかししたかにそれに違いなかったとしても、少女の感傷を抑えて「嬉しい情趣」にしたものは、少し冷静に鑑賞すれば、女性としては珍しい漱石譲りの写生であったことに気がつくはずである。写生文の的確な対象把握と知的に整備された考察、この理性的な心情が分析や批判において未しという点があったにしても、感傷に溺れることのない「情趣」をもたらしたのではあるまいか。野上彌生子の特色は、初期のこの詠嘆を抑えた冷徹な知的観察力、むしろ男性をも凌駕する理性の成育に帰せられるのではないか。これに英文学に養われた社会的識見が加り、いよいよ深さ

と広さを加えた理性的な写実の文学としての鋭鋒が発揮されたとみることができる。

しかし野上彌生子を一口に写実の文学といつてはその重要な半面を閑却することになる。夏目漱石に学んだものは写生文に根柢を置くリアリズムの道ばかりではあるまい、否、むしろその精神、理想の継承発展においてこそ重要な意味がある。或いはこういつては誤であるかも知れない。彌生子には持つて生れた鋭い倫理観があり、善美を本能的にかぎわけて素直であり、人生観照において機敏であるが、これが作者独特の観念追求、理想探求になって、漱石の門下たるに恥じない大きな特色となっているのである。作者のリアリズムはこの理念に裏づけられて働いている。彌生子は息子が誕生すると、写生文の臭味が抜けた所謂母親の文学へと脱却するが、大正デモクラシの下での児童教育を考え、作者の理想とする構図を児童の生態の中に描いている。相変らず児童の日常を的確に把握、知的に整理しながら、同時に作者の理想とするところの構図をもつて裏付けている。ここでは作者の念願とする理想主義がある。

しかも彌生子の理念は作品を多様な可能性において発揮し、日本特有の芸術文化の一つである謡曲を藉りて、戯曲時代に対応するかと思えば、東京生活の端緒をひらいてくれた叔父の死を追憶して、身体障害者の数奇を極める奮闘的生涯を四部作『狂つた時計』に仕立てている。作者の大正文学の代表作として何人も取上げる作品に『海神丸』や『大石良雄』があるが、そ

こに何より倫理的、理念的思慮が働いていて、この対照的な幅をもって写実を支えている。作者の文学の深处には善美の理念があり、聖書やギリシャ・ロマの神話を含めたアカデミズムも働いて、誰よりも健康に脈打ち、いよいよ規模を拡げてみせる。観念的な作柄から写実的な作柄まで、作者の驚くべき精神力の持続と拡大との秘密はここに窺えるのではあるまいか。こういう点では作者の同時期の作家と肩を並べていささかも劣らず、むしろ超越し、しかも個性的な光茫をさえ発揮している。

彌生子は大正末期に「みちのくの旅」に出て明治女学校時代の旧友の家に立ち寄り、「集合家族制度の標本的な遺物」を目撃した。マルクス学者の説く「資本主義経済機構の崩壊」はまんざら信ずるに足らぬ妄説ではなく、昭和初期の社会運動、学生運動の由来を深く理解しながら、なお且つ青年独特の理想主義を見抜き批判的たらざるを得なかった。『真知子』から『若い息子』などをへて原『黒い行列』、『迷路』に及ぶ一聯の作品は左翼に、革新に同情的ではあっても、作者の理念はかれらから独立に、独特の立場を保持していた。青年が期待する将来社会が実現したとしても必ずしも完全なものではないだろうという深い懷疑を抱きながら、なおスバルタの母たちが息子にいう一言、「盾にのって帰れ」にも似た「一言のゆるぎない教訓」(『私信』昭和八・五・婦人公論)つまり確乎とした倫理を追求する点で、あくまでも健康であり、規模が大

きかった。

戦争で中断を余儀なくされた『迷路』を改めて書き、多くの現代作家の中にあつて、戦後文学の貴重な出発点としたとき、昭和初年代の青年たちの左翼運動を「一種の精神運動」とみることを明かにした。勿論、完成された『迷路』は政・財界から貴族社会にわたる重層的な社会構造にわたる雄大な規模のもので、単に転向者の動向・その精神の持続や信念を追求するものではなかったが、作者の善美に生きる理念、理想主義もしくは人道主義の立場は明白である。

作者の戦争体験は、『迷路』にとどまらず、『秀吉と利休』の歴史的構想を生んで政治と芸術の問題を独創的な歴史小説に仕立て、深く信ずる理念を説いてやまなかった。しかも『迷路』に日本芸能の粹である能楽を一つの象徴に据えたのに対照して、『秀吉と利休』では日本独自の生活文化である茶道を主題の中心に掲げて潑刺たる生氣をもつて解明するという方法をみせている。しかも歴史にも審美にもかかずらわらない作者自身の詩的構想力を自在に振舞って独自の内観的な理念追求をみせて、私どもを驚嘆させて憚らない。

戦後『迷路』と『秀吉と利休』という二大長篇を完成して生涯の代表作としたばかりでなく、さらに昭和四十七年五月からここ十余年間に第三の長篇小説『森』を大半仕上げて、その精神力の驚くべき持続と拡大とを示して、私どもをいよいよ驚嘆させ、己の懶怠を恥じるの他を知

らない。しかも『森』は明治中期に自己の学んだ晩い衰亡期の明治女学校をば舞台に選び、自ら注するところに従えば、自伝小説とはせずに、女性文化史とするという昂然たる意図を語り、その志の漱石の弟子ならではの感慨のほどをみせる。白井吉見がかつて『安曇野』第一部で木下尚江を主人公に描いていた時代に相当することを思えば、これはまさしく明治三十年代という歴史時代の女性文化史を語るにふさわしいと誰しも諒解せずにはおかぬ主題たるにちがいない。私はその意図を壮とし、ますますもって作者の詩的構想力の中核に働く内観的な理念追求に囚れざるを得なく、深々と脱帽して憚らないのである。

野上彌生子は冷厳な写実家にして、また宏遠な理想家である。しかも学は古今東西の要をおさえて矯激に馳せらず、倫理に思慮と分別とをふまえて健康に人生に取組んでいる。このことは創作だけではなく、多様な随筆・感想・評論に知恵となり風味となって私どもを堪能させ、充実感に溢れさせ、教えるところ多大である。文学者として当然ながら好奇心に人並外れて富んでいるが、老齢に新しい語学を学び、田辺元に哲学の講義をきくというまでに積極的で、これが綿密な海外紀行の驚嘆すべき内容を形成して写真と理念とを兼備している。時事問題にも理性的に善美を抱く人として当然積極的・先進的であり、平和反核問題をはじめ機会ある毎にその推進に参加している。学識が豊かで、識見が高く、判断が確かであるから、対談・座談の

名人で、時にはユウモアをもって、座を賑わせて、実に興が尽きないのである。私は徒らに讃辞をばかり弄しているのではない。作者の精神力、その強靱と集中との特色を挙げて、おのずからここに到ったに他ならない。

これを本書の序章として、長い時期にわたる、しかも幅広い彌生子の世界の見聞と探求とに赴くことにしたい。

二 写 生 文

一 非常に苦心のゆゑなり。然し
 此書は商務の苦心なり。悦
 々たる前に全作ふべきこと
 ありきなり。

一、新に筆をとり、
 米穀又中に筆を
 形容を便す。尤も
 一、筆を便す。尤も
 一、筆を便す。尤も

明治四十年一月十七日付野上八重宛漱石書簡

明治三十年は詩歌の年であった。一月に与謝野鉄幹の『天地玄黄』が、四月に宮崎湖処子編の『抒情詩』が出版され、八月に島崎藤村の『若菜集』が出現し、日本の近代詩は抒情詩として初めて美しい結実をみせた。換言すれば浪漫的自我が覚醒し、開花し、確立し、充実し、その成果をあげた年であった。しかしそれも束の間のこと、三十年代の半ば近くには、かように眼ざめて解放された浪漫的自我を、自然の中に、社会の中に、歴史の中に位置づけ、自ら検討しなければならない時にめぐりあった。明治三十三年八月に徳富蘆花の『自然と人生』が、翌三十四年三月に国木田独歩の『武蔵野』が、少し遅れて出版されるが、島崎藤村の『千曲川のスケッチ』(明治四五・一二刊)が準備されたり、着手されたりした。

徳富蘆花や国木田独歩や島崎藤村はいずれも西洋画に写生を教えられて、事物の客観的認識や精確な表現手法を学んだ。浪漫的自我の可能と膨脹とは厳密に客観的に反省され、制約され、その実質が厳粛に検覈されていった。新しい散文の時代の到来である。これより早く、同じく西洋画に写生を教えられ、短歌から俳句を革新し、文章の改革に乗り出した正岡子規がいる。浪漫家の与謝野鉄幹と論争し、現実家の正岡子規は敢然と子規鉄幹不可併称説まで主張するほ

ど、その対立は一本気にきびしいものがあつた。

正岡子規の文章革新は「写生文」と唱えられ、その天折の後も、門下の間に承け伝ひ、栄えた。高浜虚子らが子規の警語から名づける「山会」^{やま}を組織し、独歩、花袋、藤村らの自然主義とは一脈味の異なる写実主義（思想的には理想主義）を唱え、写生文による写実主義を以て文壇に一派を起した。俳句雑誌『ホトトギス』はいつのまにか文学の綜合雑誌となり、後には虚子の『国民新聞』の文芸欄（『国民文学』欄）や夏目漱石の『朝日文藝欄』と呼応して、新たに写実的理想主義とも呼ぶべき反自然主義をきりひらいた。

夏目漱石は、周知のように、正岡子規の学生時代からの友人である。子規に俳句を教えられ、ロンドンに留学してからは病友を慰めるために写生文のつもりで『自転車日記』を書き送った。そんなことが縁故になつて、虚子に薦められ、独自の滑稽文学『吾輩は猫である』を書いた。

漱石が作家として活動する源泉になつたのは俳句であり、写生文である。写生文には対象的確な認識と精密な描写との他に、俳諧に由来する主観的な余裕や諧謔があり、浪漫的（或いは理想的）自我の機能があり、自然主義とは一味ちがった自我の活動がある。それはとにかく、漱石が虚子の一派に加つたことによつて、『ホトトギス』は漱石門下の活動の舞台となり、一層色彩を加えた。

2 写 生 文